

2015年1月8日

経済セミナー2015年3,4月号

「オークションとマーケットデザイン」第13回

松島齊

東京大学経済学研究科教授

宇沢弘文先生とわが大学生時代

1. 宇沢先生亡くなる

昨年2014年9月18日宇沢弘文先生が亡くなられた。享年86歳。私は東京大学の経済学部生だった1981年、82年に宇沢先生のゼミに所属していた。先生は私のかげがえない恩師。

年末になってもテレビで特番が組まれるなど先生の足跡は幾度も報道され、社会的影響力を改めて痛感。しかし「経セミ」の読者のほとんどは、先生のことをもはやご存じあるまい。だから今回は予定を中断し、宇沢先生のことを書こうと思う。

宇沢先生は、もともと東京大学で数学を専攻されたが、経済学に転向され、1950年代後半ごろから膨大な数理経済学の基礎研究を発表され、またたくまに経済学界の中心人物になった方だ。さらに二部門成長モデル、最適成長理論といった、経済成長の動学分析において決定的な業績をあげ、スタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレー校、シカゴ大学のファカルティーを歴任された。

1968年に東京大学に戻られてからは一変して、主流派とされていた「新古典派経済学」を強烈に批判する姿勢に転じ、「社会的共通資本」の概念を提唱するようになる。このころに出版された「自動車の社会的費用」(宇沢 1974)はベストセラーとなり、社会思想家としてのキャリアがスタート。また、高度成長の代償として深刻であった公害問題、成田空港建設における地元民と政府の対立、いわゆる「三里塚闘争」の調停に積極的に関与する、社会活動家としても大きくクローズアップされた。

以下に、私が東京大学に入学し、宇沢弘文という巨人に出会い、宇沢先生と経済学を相手に、勝手に奮闘していた大学生時代をお話したい。先生がお書きになったかなりの数の日本語の著述を必死に読んで、自分は今後経済学とどのように向き合って「生涯一研究者」を貫くことができるか、を日々考えていたのだ。

私にとってこれは真剣勝負。宇沢先生が亡くなられた今、当時のことを若い人に伝えたい。私自身の過去をアナライズすることで見えてくる宇沢先生像を明らかにしたい、というわけだ。

以下には、宇沢先生をよく御存じの方に、意外、と感じられる箇所もあろう。でもそれは、私にとっては、先生ご自身が書かれたものと同じくらい、いやそれ以上に、まぎれもない真実。それに、経済学や経済問題にかかわらないではすまされないこれからの人に、こうしてずいぶん長く研究している一学者が、学生のころなにを考えていたかの一端をお話することにも、いくばくかの意義があろう。

2. 「ネコ文Ⅱ」に気付く

私は1979年に駒場東邦高校から東京大学文科Ⅱ類に入学した。東大ではみんな熱病のように学問している。このなかで活路を見出さねばならない。私は中高でなまけていたが運よく東大に入った。今や知的好奇心のたがが外れた。

これを機になんとか独自の方向を見出したい。自分にはそれができる圧倒的優位がある。漠然とこんな自信過剰になっていた。

しかし、駒場教養課程の文科Ⅰ類と文科Ⅱ類の混合クラスでは、文Ⅱの学生はみな文Ⅰにおよばないという劣等意識を持っているような感じで、どうも全く面白くない。

それもそのはずで、当時は「ネコ文Ⅱ」と揶揄され、駒場キャンパスで勉強している種族を上からランクすると、猫の次に文Ⅱだとされていたのだから仕方ない。しかも、どうやら私の年は特に「はずれ」のようで、これでは私が合格したのも無理ない。というわけで、どこか社会科学系のサークルを探すとした。

新生を歓迎するイベントの折、いくつか勧誘を受けるが、どこもかしこもマルクスで、しかも「資本論」を何回読んだのとかを競っている様子なので、「マルクスはお経なのか。学問はお経じゃないだろ。これでは両親に申し開きが立たないだろう」と思い、さらに落胆した。

唯一「文Ⅱ文化」という、やはりマルクスも含む経済学系のサークルだけは、ずいぶん軟派であって、「東京大学は、一橋や慶応に比べてマルクス経済学者やその関連の先生がたしかに多いが、そうでない先生で突出された存在がいらっしゃるので、悪い環境でない。一緒に勉強しませんか」と誘ってくださったのは、現在日銀におられる佐々木雅浩さんだ。

佐々木さんが「文Ⅱ文化がほこる俊英を紹介しよう」といって、登場したのが神取道宏さん（現在東京大学大学院経済学研究科における重要人物）。驚いたのは、佐々木さんが同学年をこのように紹介する人の好きぶり、そして、それでも平静を装っている神取さんの傲慢さだ。血の気の多い人間だった私は、闘犬のように、倒すべきライバルは神取氏、と直感した。（私のこのような不自然な闘争癖は、高1の夏休みに「宮本武蔵」を読んだことが原因だ。ただし今ではすっかりそうでない。）しかし、神取さんにはその後尋常ならざるお世話になり、もはやいなくてはならない存在となって今に至る。これが現実というものだ。

いずれにせよ、躊躇なく「そうします」とお応えした。

3. お写真におびえる

佐々木さんが「突出された存在」というのは、宇沢弘文先生、小宮隆太郎先生、根岸隆先生、濱田宏一先生、それに気鋭の石川経夫先生のことだ。なかでも、宇沢、根岸、小宮は「三巨頭」とされ、国際的には宇沢、根岸が圧倒的な存在感を示していた。特に宇沢先生はいろんな意味で別格の方で、「近い将来直接教えを乞うといい」というようなことを、佐々木さんにいわれた。

その時に見せていただいたのが先生のお写真で、経済学のトップの専門誌である「Econometrica」を刊行している Econometric Society (世界計量経済学会) の会長を務められていた 1976 年ごろに Econometrica の巻頭に掲載されたもの(およびその他いくつかのお写真)だ。

見たとたん、そのえも言われぬ異形に言葉を失った。「研究者のトップに君臨するためにはこれほどまでに厳しいお顔にならねばならないのか。」その後は、神保町すずらん通りに「揚子江菜館」という中華料理屋があるが、その看板が怖い顔の京劇の仮面で、この仮面と Econometrica のお写真とがどうもダブるようになり、以前は家族と冷やしそばをよく食べに来た淡い思い出が、今では宇沢ゼミでじっと先生のお話をお聞きしながらそばをすするように変わって久しい。

4. 駒場でいろいろ勉強する

駒場教養課程の授業の中では、内田忠夫先生がサミュエルソンの「経済学」(Samuelson 1948)を教科書に、ミクロ経済学をメインにきっちりした講義をされ、大変ためになった。ゲーム理論や情報の経済学などまったくない時代の教科書であり、今日的価値があるとは到底おもえないが、それでも、豊富なテーマや事例が解説されていて、経済学の面白さがよくわかる。

サミュエルソンの次に読むべきは、今井賢一、宇沢弘文、小宮隆太郎、根岸隆、村上泰亮共著の「価格理論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」だった（今井、宇沢他 1971-72）。この本の存在は大きく、大学院受験の際にはしらみつぶしに読まされる羽目になる。

しかし、私は、経済学の考察対象は実際には非常に限定される、といった内容のことが序文に書かれていること、完全競争市場のモデルが、確かによくできているとは思ったが、これをフォローアップしようとはまでは感心しなかったこと、の二点のため、これでは果たして私の興味が続かないのではないかと不安を感じた。完全競争だけではつまらない、と思ったわけである。不完全競争、市場の失敗といった、完全競争でないテーマの方に興味があり、熱心に勉強していた。

この時、アローの「社会的選択と個人的評価」の翻訳を読み、大いに感心した（Arrow 1951）。文Ⅱ文化のある先輩から、アローの定理は「民主主義が原理的に成立しえない」ことを証明したという先入観では読むべきでない、というようなことを忠告されるので、ならば私は、個人の選好を規則性のある順序としてモデル化すること、個人の選好を集計する際にはパレート最適が必須条件であること、が、非常に一般的な枠組みにおいて議論されている点に、特に注目するようにした。価格理論で書かれているのはことなり、経済学の研究対象はもっと広範囲を想定できること、問題解決は完全競争のようには容易でないこと、を学んだのだと思う。

駒場では、中高から親しい友人であった滝澤弘和さんとよく行動を共にしていて、「構造主義」という考え方にお互いに興味を持つようになった。未開社会を理解する場合、心理学的分析でなく、その社会を意味付けている背後にある構造を明らかにするのが大事だとするアプローチだ¹。

しかし、解説文や翻訳はわかりにくく、東大の先生で関連しそうな方を見つけることもできなかったので、滝澤さんといっしょに、駒場のカリキュラムに「構造主義」というタイトルの自主講座をお願いして、北沢正邦さんという

¹ レヴィ・ストロース（1962）。

人類学研究者の方をお招きし、合宿までした。結局よくわからずじまいだったが、その後の浅田彰に代表されるような「ポストモダニズム」の先駆けのようなことをしていたのだろう。

経済学と構造主義は、個人や社会を合理的に説明するという点では、よく似ていると思った。滝澤さんは母校駒場東邦における秀才、いや天才肌の人で、滝澤さんに勧められて構造主義に触れられたのは幸運だった。滝澤さんは、以後紆余曲折を得て、今かなり近い分野の専門家として、中央大学経済学部で活躍されている。

経済学は選択の科学である。研究者が分析対象の選好をどうとらえるかは、経済厚生を考える際になくてはならない、繊細なステップである。パレート最適は経済厚生の必須条件であり、もしこれをよしとしないなら、よほどの理由がないといけない。非合理的な現象や概念はどのみち選択の科学と結び付けられなければならない。

このような経済学に対する合理的な見方は、私にとって今や基本だが、既に駒場生のころに培われていたように思う。これを、特定の書物や講義から学んだのではなく、自分独自の知的冒険によって見つけたのだといたいわけ。

5. 宇沢先生にお会いする

経済学を勉強したい学生のために、ふたつの重要な雑誌が、当時刊行されていた。一つはいわずもがな「経セミ」。もう一つは日本経済新聞社の「季刊現代経済」だ。

特に季刊現代経済は、読者を選別する硬派の雑誌で、宇沢先生、小宮先生、根岸先生、村上先生、青木昌彦先生、稲田献一先生といった代表的研究者が、専門性の高い原稿を執筆していた。私が宇沢先生の本に接した最初は、季刊現代経済に掲載された原稿であろう。今日このような雑誌がないのは痛恨の極みであり、責任を感じる。商業的成功を収めることはまず出来ないだろうが、このようなシリーズは、学者のたまごにとって永遠の価値になる。

宇沢先生は、既に多くの日本語の著述を書かれていたが、その内容は、その異形にたがわぬ痛烈なものだ。完全競争をベースにした「新古典派経済学」、つまり当時の主流派経済学に、徹底的に「No」を突きつける様は、刺激的で爽快だ。

当時一番の標的といえ、それはルーカスやサージェントによる「合理的期待形成」仮説であった²。合理的期待形成とは、経済主体が実際の市場価格を平均的には正しく予想できるとする仮説であり、経済主体がおりこめない情報はホワイトノイズとして扱われるとする。資産市場における「効率的市場仮説」にも相当する、今でこそよく知られたこの仮説は、1980年当時には「黒船」ととらえられていたのだ。

私はこの合理的期待形成仮説に魅せられた。しかし宇沢先生は、ことのほか強い批判を繰り返される。ならば、来年（1981年）の五月祭に、文Ⅱ文化の企画として、シンポジウムをやってみてはどうか。どなたをパネリストとして呼びすればいいのか？当然宇沢先生でしょう。では、誰が頼みにいく？当然松島でしょう。というわけで、宇沢先生に連絡をとって、はじめてお会いすることになった。1981年3月ごろ。本郷に進学する直前だ。

宇沢先生は、学部長として、社会活動家として、多忙を極めてらっしゃった。学部長室にお伺いすると、想像以上にあごひげを白く伸ばされているので、京劇の恐怖から一変してユーモラスな印象にかわった。シンポジウムの件をお願いすると、なかなかお返事頂けず、合理的期待形成の研究者についていろいろ話されるので、ちょっと矛先を変えようと、「実は私の叔父が宇沢先生と一中の同級生だったようで」と切り出した。すると、目をカッと見開いて、「へえそうなの？」と。そこからはまたかなり長いお話が続き、でもそれは一中時代の話なので愉快になった。

司会を館龍一郎先生をお願いするとして、合理的期待形成サイドの人選は私たちにまかせるとなった。が、パネリストの人選は難航を極め、宇沢先生で

² Lucas (1972).

は恐れ多いという以外に、「あんな失礼な人とは同席できん！」といきなり電話を切られるなど、いったいこの方は今までなにしてきたんだろ。

結局、あるお二方にご参加いただけることになり、5月24日シンポジウム「合理的期待形成とケインズ政策」を開くことが、無事出来た。私は既に宇沢ゼミ生になっていて、シンポジウム後は、言わずもがなエンドレスドリンク。

宇沢先生いわく、合理的期待形成は実際の経済主体の期待形成の仕方に即したモデルでないし、前提とされる経済モデルも陳腐だ。一方、ケインズの「一般理論」(Keynes 1936)には、リアルな期待形成の作法についての重要な記述がある。第12章「長期期待」のあたりを指しているようだ。

以降、ゼミでは、ケインズの一般理論を丹念に読んでいくことが中心になる³。

6. 宇沢ゼミにはいる

ゼミ選びは今よりもっと重要だった。場合によっては、ゼミは学生生活を支配することになるからだ。

私はミクロ経済学を勉強したいので根岸ゼミを考えていたが、神取さん(根岸ゼミ)にはつよく宇沢ゼミを勧められ、泣く泣く断念。文Ⅱ文化の先輩に山根啓さんという、通産省に行かれた方には、「私は小林孝雄先生のゼミに入った。小林先生はゲーム理論の専門家だ。これからはゲーム理論だ。」とお聞きし、迷った。小林先生は、その後ファイナンスの専門家として活躍される方だが、ゲーム理論で博士指導をしていただく、私のもう一人の恩師になる。

神取さんから、「今年の夏学期(1980年)の小林先生の特別講義「組織の経済学」は東大にとって今までにない画期的な内容だから、ノートをあげる」といっていただいて、勉強した。社会的選択理論、市場組織(コア、一般均衡、公共財など)、そして最後には、今まで聞いたことのない話が紹介されていた。それは、神取さんのノートによると、William Wickregの1961年の論文について

³ Keynes (1936).

だ。ようするに、これは Vickery の最初の論文のことで、神取さんにしてはめずらしい書き間違い。連載で口酸っぱくでてくるグローブス・メカニズム、VCGメカニズム、ヴィックリー・メカニズムのことだ (Vickrey 1961)。これが私にとって、ゲーム理論とメカニズムデザインの、最初のまじめな出会い、とっていい。

東京大学は、今でこそ日本におけるゲーム理論のメッカだが、1979 年以前にはゲーム理論は皆無だった。その頃には、東京工業大学において、鈴木光男先生のもとで、ゲーム理論が既にさかんだった。特に金子守先生は今日でもカリスマ的存在であり、ときおり金子先生がゲーム理論を東大にもたらしたと聞くことがある。しかしこれは間違いで、当時小林先生がおこなった 1980 年の「組織の経済学」と 1981 年夏学期の「ゲームの理論と経済学」が、神取さんと私の人生に決定的なインパクトを与えた。

私はこの肝心のヴィックリーが皆目わからず、これではゼミについていけないのではないかと思い、小林ゼミは断念することにした。(しかし、本郷に進学後には状況はかわっていく。) 結局、宇沢ゼミを希望するとした。

宇沢ゼミ参加に際して、先生が書かれたものを今一度よく理解しようと、ノートにまとめるようなことをした。

新古典派経済学には問題がある。需給均衡価格がフローのレベルで成立すると考えるのは、実際の経済をよくモデル化してない。新古典派は、個人や企業を粘土のように微調整できると考えるが、現実にそぐわない。環境などの自然資本や、医療教育などの社会資本を総称した社会的共通資本は大事だが、新古典派経済学においては無視されている。

さらには、ロビンズによる経済学の定義には問題がある (Robbins 1935)。パレート最適を追求することには問題がある。ベンサムが問題にした平等や公正といった個人間比較が大事である。という内容のものもあった⁴。

7. ケインズにふりまわされる

⁴ 宇沢 (2014) を参照されたい。

宇沢ゼミは、ケインズの一般理論を原書で丹念に読んでいくというものだった。先生はいくつかのことをあらかじめ忠告された。

一つは、「ハーヴェイロードの前提」について。高い知性をもつエリートが経済をコントロールする立場にある。ケインズはこの立場と経済学者の立場を同一視している、といった内容の前提条件だ。

もう一つは、一般理論が念頭に置いているのは、大恐慌のような不安定な経済状態である。サミュエルソンの教科書で習ったような、「ケインジアン」のIS-LM分析は、平時を念頭に置いているので、それとはわけが違う。

さらには、ケインズとヴェブレン (Veblen 1904) の類似と相違である。ともに、個人や企業は微調整のきかない固定的、非合理的な存在としている。相違は、ヴェブレンが、資本主義における政府が恐慌を解決するのは、「浪費」という非道徳的やり方だと批判するのに、ケインズは、英知にたけた政府が財政政策によって有効需要を創出できるといって、もっと前向きだ。

最後に、ヴェブレンの方がケインズより偉大な存在であり、ケインズにおいては社会的共通資本の概念をどう組み入れるかが課題だ、というようなことも述べられた。

これらのことは正直ずいぶん不正確な記憶に基づくので申し訳ないのだが、とにかく、宇沢先生は、我々にケインズを批判的に読むことをすすめられていたのだと思う。

どうやら先生は、かならずしもケインズがお好きというわけではなさそうだ。まだよくわからないから一緒に読みませんか、という感じ。こうして、我々新ゼミ生は、宇沢先生と同じ方向を、いきなり向かされてしまった。

私には、ハーヴェイロードのうんたらの下りがどうも気に入らない。というのも、そろそろゲーム理論をかじりだして、政府は、経済学者そのものでなく、むしろそれ自体が戦略的分析の対象と考えていたからだ。また、もし政策担当者として一般理論のような本を書くのなら、「あなたがたは予防の仕様がなほ非合理におちいる存在だから、私のような知識人にいろいろ任せな

ければいけない」といったたぐいの説明を、もっともらしくすることだろう、とも思った。

いずれにせよ、しばらくはゼミにしたがって、一般理論を読み進めていくのだが、いかんせん私の興味はどんどん失せていくことになる。

8. ゼミで飲み明かす

宇沢先生はとてもお忙しい状況だったが、我々との付き合いには非常に熱心でいらした。ゼミの時間外には特に。

ゼミの時間を過ぎてもなかなか先生はいらっしゃれない。そのうち、学部長秘書の岡さんがいらして、「先生は幸楽でおまちです」とのこと。幸楽とはかつて本郷通りぞいにあった二階建ての中華料理屋で、ゼミの後にはかならずみんなでいく行きつけの店だった。

二階に上がると、このような時にはかならずどなたかとビールを飲んでらっしゃる。それが（やたらハンサムだった）植田和男先生だったり、ノーベル賞をとられたマンデルだったりするわけだ。マンデルのような特別なお客さんでない場合には、かならずとっていいほど、「〇〇くんだめになっちゃったでしょ」と嬉しそうに悪口(?)をはじめ、「△△くんといっしょに仕事するようになっちゃったでしょう」と意味深な理由を説明しはじめる。その際には、かならずお手拭のタオルで、テーブルの前をくるくる拭くのが癖で、私はこれが大好きで、しょっちゅうこれのまねをして今に至っている。

実はこういう時には、かならず本音が出るもので、いつも聞き流さないように、あるいは、あえて、いやがる経済学の質問をすることにしてきた。いやがるけれども、結局ゼミの最中より真剣に話をしてくれるので勉強になった。特にフリードマンの批判については、学術的な研究の内容に対してではない、というようなことを話されて、書かれているものと少し違うのかな、と感ずることもあった。

幸樂のあとは、新宿にみんなで繰り出して、二か所ほど梯子する。時々いろんな人と偶然の合流があり、回数は少なかったけれども当時駒場で教授をされていた西部邁先生にもお会いすることがあった。

梯子の最後はたぶんゴールデン街にあったお店かと記憶しているが、この原稿にかけない乱痴気もあり、ずいぶん破天荒。また、よく怒ったりしてびくりだったがそのうち慣れ、それなりに楽しい思いをしたと思う。

新宿がおわると終電もないので、タクシーで保谷市の宇沢先生のお宅までみんなで（もちろん西部先生も）おじゃますることになる。先生のお宅には離れがあつて寝泊まりできるようになっていて、「迎貧館」とか「下品館」とか好きに呼んでいた。そこでみんなでごろ寝、もちろん西部先生も。

翌日は、宇沢先生はすでに早々から起きておられ、どうもジョギングなど朝のお勤めをきちんと済まされたらしい。「うどんをうってうでてるから、食べてってくれ」。そこで酒盛りが再スタートして、途中で帰りますというと「かえらないで」といわれるので、結局午後 4 時ごろ散会した。今度は西部先生から新宿にうまいラーメン屋があるから一緒に行かないか、とおさそいされるが、もう新宿はいやなのでさすがに丁重にお断りして自宅にもどった。その晩（土曜日）は、「もうこのゼミやめたい」と母親にあたるわけだが、翌週にはしょうこりもなくまたゼミ通いしているわけである。

9. 「レモン」に出会う

宇沢ゼミには、すぐれた先輩 **OB** が大勢で、ちょっと気後れする気分でした。教材となっているケインズには興味がうすれ、マクロ経済学にもともと興味あるわけでない。徐々に、宇沢ゼミとは無関係に、自分なりにテーマを見つけていこうということになってしまった。しかし、小林先生の講義以外はまったく興味がわかない。

経セミ、季刊現代経済、さらには京都大学、一橋大学といった国内の大学の紀要を読み漁っていて、そのうち一つの重要なワードに出会う。それが「情

報の非対称性」で、東大のどの授業にも顔を出さない概念だった。しかも、「レモン市場」という、かあいらしい名前までついてるでないか。

もっとも、レモンというのは、外見では中身の分からない粗悪な中古車のことで、情報の非対称性というのは、中古車の売り手は品質をわかるけれど、買い手は購入してみなければわからない。そのため、レモンをつかまされることを恐れ、中古車市場には買い手がよりつかなくなり、ついには市場が消えてなくなる。と、まあこんなストーリーだ。

大事な点は、レモンは中古車に限らずどんな財サービスにもつきまとう普遍的問題だということ。そして、もっと大事なことは、にもかかわらず現実に市場は崩壊してはいない、ということだ。

そこで、経済学部の図書室で、アカロフの「レモン」のオリジナル (Akerlof 1970) をコピーして、原書を丹念に読んでいくことにした。なにしろ「Used Car」も自力で訳せないほどの英語力だが、2日徹夜で読破して、自分でモデルを作ったり分析したりしているうちに、研究者としてやってけそうな気分になった。

アカロフのレモンが研究者としての原体験であり、これとゲーム理論を組み合わせれば、経済学が扱える問題は広範囲に及んで、状況に即してゲームのモデルをその都度作ればよい、とわかってきた時点で、経済学が生涯をつうじて研究していくに足る学問だと確信した。

このころから、経済学部図書室の洋雑誌コーナーに入り浸るようになり、いい加減ではあるが、スペンスやスティグリッツなどの情報の非対称性に関する論文をかたっぱしから読み漁って、卒業論文の構想を立てた。

10. 宇沢先生に失礼なことをいう

宇沢先生に、大学院に進学したいことを話しにいくと、あまり勧めない様子なので、実は全く新しいアプローチを考えていて、アカロフのレモン市場の論文がその基礎になっていると説明した。すると、ひどく驚いた様子で、こっちもびっくりしたが、「それはとても素晴らしいことだから続けなさい」との

ドバイスで、いつになく早く帰れた。その後も幾度か宇沢先生を訪ね、細かいことまでアドバイスをいただくことができた。

私の卒業論文は「情報の非対称性下の経済行動」というタイトルで、情報の非対称性を、アカロフの論文における完全競争的モデルとはことなる市場メカニズムにおいて理論分析するものだった。この論文で、経済学部から、当時新設された「大内賞」をいただく。

ある時、宇沢先生は、アカロフとスティグリッツは自分に師事していたことがあるので、これらの研究をよく知っていると教えていただき、またびっくりした。どうしてもっと早くアカロフやスティグリッツのことを話してくれなかったんだらう。東大には立派な先生はいるけれど、レモンのような革命的なアプローチはなかなか紹介してくれない。こんな教育でいいのか。

さらに調子に乗りすぎて、「ケインズと社会的共通資本はそりあわない。」「ケインズは、ヴェブレンと違って、市場をコントロールする立場を正当化するために、硬直性やら非合理性やらを持ち上げているだけだ」などと、とんでもない言い分を投げてしまった。すると、宇沢先生は、「この本、余っているんだけど読んでみたら」と私に渡したのが、フリードマンとシュワルツの「金融史 (A Monetary History of the United States 1867-1960)」だった (Friedman and Schwartz 1963)。

フリードマンといえ、先生がずっと批判し続けてきた新古典派経済学、新自由主義の代表格。「これは相当怒らせてしまったか」と思い、すごすご退散することにした。しかし、宇沢先生のことだから、本当に読んでみてほしいと思って私に渡したんじゃないだろうか。しかし、この本は数百ページにおよぶ大著。とても今読んでみる気になれない。先生のお書きになられたものの中にもこの本のことは登場しない。私は、フリードマンのことは、先生からお聞きしていたこと以外何も知らなかったのである。

この本がただごとでないと思ったのはだいぶ経ってからだ。特に、大恐慌の第7章。そこには、ウォール街暴落後に、流動性が安定的に供給されること

が金融システムを健全にさせるに不可欠だったこと。しかし実際には、FRB にそれができなかったこと、が書かれている。

なにより重要と思ったのは、金融政策の有効性云々とかでなく、知識や経験のあるまともな専門家が意思決定時にイニシアティブをとれなかったこと。つまり、当時の政府 (FRB) のガバナンスに大きな欠陥があったことを、経済学者という、「独自の」立場から、明らかにしたことだ。私は合点した。

1 1. 先生の先生に助けられる

大学院を修了してからは宇沢先生にお会いする機会がめっきりなくなってしまった。しかし、一度だけ、感動的な仕方で、先生に急接近したことがある。それは、1990 年ごろ、コーネル大学でおこなわれた理論経済学のコンファレンスのことだ。

同席されていた神戸大学の下村研一さんによると、このコンファレンスには、「八百万の神」が集結していたとのこと。なかでも、ハーヴィッチ先生は、この連載のテーマである「メカニズムデザイン」の創始者であり、神様だ。

ハーヴィッチ先生は、私が学部 4 年の時に、東京大学大学院で特別講義をされた。私は後で、当時大学院一年生の神取さんからノートをいただいて、そこで初めて、メカニズムデザインのフレームワークを知った。このノートは私の宝だ。

ハーヴィッチ先生の講義ノートの最後には、2007 年にハーヴィッチ先生とともにノーベル賞を受賞されることになるマスキンの「ナッシュ履行可能性定理」が紹介されていた (Maskin 1977/1999)。(履行問題 (Implementation problem) は、今回の連載で予定されていたテーマ。次回以降にはきっとかならず解説されよう。) 実は、私は、このコンファレンスで、マスキンのノーベル賞受賞作となるこの定理とは全く違う発想の、新しいメカニズムデザインの方法を報告することになっていた。後に「AM (Abreu-Matsushima) メカニズム」と呼ばれる

メソッドで、このコンファレンスは、共著者のアブルー教授も含め、最初の報告機会だった (Abreu and Matsushima 1992)。

私は、東京大学で 1988 年に博士号取得後しばらくして、スタンフォード大学とプリンストン大学に留学していた。とにかく英語が極端にだめで、海外でのセミナーはことごとく元気ない不成功に終わっていた。しかし、今回は私にとって「勝負論文」。失敗は許されまい。

そんな折、ハーヴィッチ先生が、報告前に私に声をかけてくださり、それどころか、論文片手に矢継ぎ早に質問してきた。なんだかリラックスしてきて、ハーヴィッチさんがロジックを最後にもう一度確認され、即私のセミナー開始と相成った。すると、ハーヴィッチ先生が、要所で内容確認の質問をされるので、話す方も聞く側も、AMメカニズムのアイデアがどんどんクリアになっていく。内容がみんなに伝わったらしい、という意味で、はじめて大成功のセミナーになった。

ハーヴィッチ先生は、報告前に、助け船をだすためのリハーサルをしてくださったのだ。どうしてかというと、ハーヴィッチ先生曰く、「Uzawa は私の弟子だ。あなたは Uzawa の弟子だ。だからあなたは私の弟子のようなもんだよ。弟子に協力するのはあたりまえ。」ハーヴィッチ先生が、メカニズムデザインをスタートさせる前、宇沢先生と数理経済学などの共同研究を多く残されたことは周知だ。

このコンファレンスは、私にとってはじめてうまくいった英語のセミナーになった。レセプションでは、私のもう一つのキャリアである「繰り返しゲーム」の神、ラドナー教授が、AMメカニズムのロジックを諳んじていた (ように私には聞こえた)。

今でもあいかわらず私のセミナーはひどいままだが、この一件以来、まったくあがるということは、もはやない。

12. 最後に

この原稿を書いている 2015 年 1 月 6 日、私は、ボストンで開かれた Allied Social Science Association 年次大会からの帰路にいる。大会では、多くのセッションが医療や教育に少なからず関与していた。医療や教育は、宇沢先生にとって、特に重要な社会的共通資本にあたる。そして今や、医療や教育についての経済学研究は、フロンティアに躍り出でずいぶん久しい。現代の経済学は、私が学生時代に宇沢先生から学んでいた頃に想像していた範囲をはるかに超えて、実に深淵である。

例えば、アフリカでは、「眠り病（あるいはナガナ病）」という、人間にも家畜にも感染し死に至る伝染病が深刻であり、経済的貧困をもたらしている。それは単に、治療や予防の特効薬がないということが問題でない。どうも、アフリカ社会が特効薬そのものを受容してくれない、ということのようだ。ここは、医療が社会科学に、とりわけ経済学に、真剣に向き合わなければならない重要な局面になる。

私が敬愛してやまない同僚である市村英彦先生や澤田康幸先生いわく、「我々は、当然のように、「生きる」ことに価値を見出す。しかし、アフリカではそうでないのかもしれない。生きることに我々ほどの希望をもっていないので、死に至る病を予防しようとししないのか。もしそうなら、だからといって、それはよくないことだと教育していいものなのか。」ここは、経済学が、社会の価値観を左右する教育の在り方に、真剣に向き合わなければならない重要な局面になる。

これらの局面において、我々経済学者は、よりよい選択とは何か、よりよい選択を促すにはどうしたらいいかを問う、選択の科学、つまり経済学の本質、に立ち会うことになるのだ。

現代の経済学の分析対象は、誇張なく人間活動全局面に広がっているといえる。私が昔「価格理論」で学んだのとは大違いだ。分析のアプローチも、ゲーム理論、情報の経済学、メカニズムデザイン、行動経済学、実験経済学、そして高度に発展してきた計量経済学など、実に多様だ。私がかつて気に入らなかった完全競争のモデルは、依然として重要であるけれども、もはや格別主役

というわけでない。もっと多様なモデルが、経済学の説明力の強さを後押ししてくれる。

このような経済学の変容は、どこかの段階でおこったパラダイムの大変革の帰結、というわけではない。実際、私が宇沢ゼミ生だったころに、すでにそのルーツを垣間見ることができた。(ゼミの教材にも使われたことがある。)つまりそれは、ゲーリー・ベッカーである。

ベッカーは、差別、中毒、犯罪といった、経済学の考察対象とされなかった領域を、選択の科学に関連付ける仕事をした。1992年にはノーベル賞を受賞している。ベッカーによる果敢な挑戦は、選択の科学を、完全競争という名の檻から解放した、と評価していいだろう。

しかしながら、宇沢先生は、ベッカーの仕事を、「結婚や犯罪の効用を考えると、まさに経済学のあるまじき侵略行為」などと、まともに取り合おうとしなかった。私は、このために、社会活動家としての宇沢先生を経済学と関連付けることが困難になってしまったと感じている。

宇沢先生は社会活動家として重要な貢献をされた。活動家のとるアプローチは、概してパターナリズム(家父長的温情主義)であり、宇沢先生も例外ではなかった。パターナリズムとは、強い立場の人が、そうでない立場の人に対して、その人のためを思って、その人本人の意思に反してでも行動に干渉する仕方を意味する。パターナリズムは、選択の科学とは厳格に区別される。経済学の歴史は、ベンサム「パノプティコン」やケインズの「ハーヴェイロードの前提」といった、パターナリスティックなアプローチを、丁寧に排除してきた。その一方で、先のアフリカの問題にみられるように、パターナリズムをどのように選択の科学に関連付けるかは、現代の経済学において欠くことのできない論点であることも事実だ。

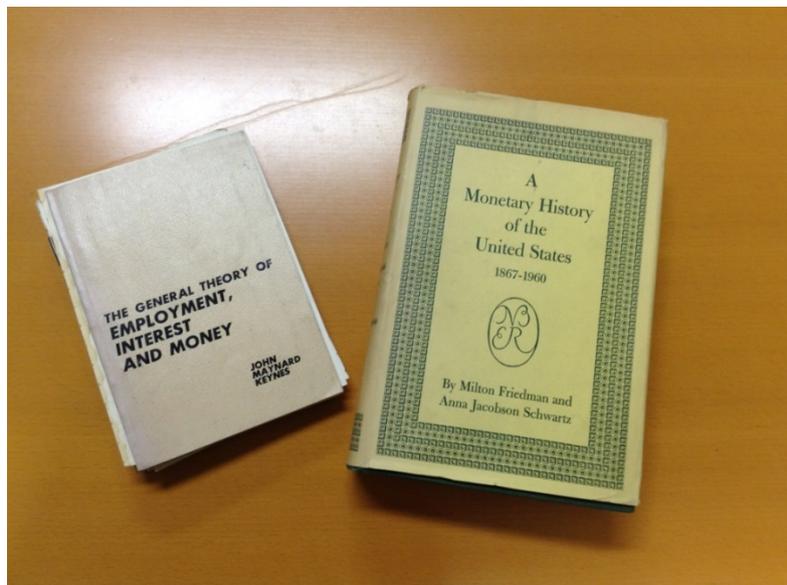
晩年の宇沢先生は、社会活動家として、あるいは社会思想家として、マスコミや書籍などを通じて、経済学を批判されることがあった。これは本質的でない内容であり、経済学がどのような学問かを知らない人に誤解を与えかねな

い。宇沢先生が社会活動家としての立場と経済学者としての立場をごっちゃにしていることから生じた悲劇であり、すこし残念に思う。

負の遺産は、あまりに大きい存在である宇沢先生なればこそであって、数理経済学や経済成長論における経済学者としての業績、公害や成田闘争における社会活動家として業績の偉大さと比べれば、些細なことに過ぎない。我々経済学者（の主要な幾人か）は、この事情をよくわかっており、しかも次のステップに、もう踏み出しているからだ。

次回の予告

今回は、本来の予定からもう一回脱線して、「情報の非対称性」についての一般的な解説を紹介したい。メカニズムデザインでは、情報の非対称性が仮定される。情報の非対称性の意味と重要性について、いくつかの関連トピック、例えば、「勝者の呪い」、「レモン市場」、「シグナリング」、「統計的差別」、「Information Cascade」、「文化的差別」、を解説したいと思う。



ぼろぼろの一般理論とピカピカの金融史

参考文献

- Abreu, D. and H. Matsushima (1992): “Virtual Implementation in Iteratively Undominated Strategies: Complete Information,” *Econometrica* 60, 993-1008.
- Akerlof, G. (1970): “The Market for “Lemons”: Quality Uncertainty and The Market Mechanism,” *Quarterly Journal of Economics* 84, 488-500.
- Arrow, K. (1951): *Social Choice and Individual Values*. John Wiley & Sons. Inc.
- Friedman, M. and A. J. Schwartz (1963): *A Monetary History of the United States, 1867–1960*. Princeton University Press.
- Keynes, J. M. (1936): *The General Theory of Employment, Interest and Money*. MacMillan.
- Levi Straus, C. (1962): La Pensee Savage, Librairie Plon (大橋保夫訳「野生の思考」みすず書房)。
- Lucas, R. E. (1972): “Expectation and Neutrality of Money,” *Journal of Economic Theory* 4, 103-124.
- Maskin, E. (1977/1999): “Nash Equilibrium and Welfare Optimality,” *Review of Economic Studies* 66, 23-38.
- Robbins, L. (1935): *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, 2nd ed. London: Macmillan.
- Samuelson, P. (1948): *Economics, An Introductory Analysis*. MacGraw-Hill.
- Veblen, S. (1904): *The Theory of Business Enterprise*. C. Scribner.
- Vickrey, W. (1961): “Counterspeculation, Auctions, and Competitive Sealed Tenders,” *Journal of Finance* 6, 8-37.
- 現代経済研究会「季刊現代経済」(1971年第1号～1985年第61号)日本経済新聞社。
- 今井賢一、宇沢弘文、小宮隆太郎、根岸隆、村上泰亮(1971-72)「価格理論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」岩波書店。
- 宇沢弘文(1974)「自動車の社会的費用」岩波書店。
- 宇沢弘文(2014)「経済と人間の旅」日本経済新聞出版社。